福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1397集

博多168

－博多遺跡群 第212・219次調査報告－

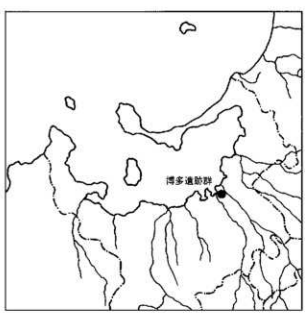
2020

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1397集

博多168

－博多遺跡群 第212・219次調査報告－



遺跡名	遺跡略号	調査番号
博多遺跡群第212次	HKT－212	１７０９
博多遺跡群第219次	HKT－219	１８０１

２０２０

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人や物の交流は盛んで，その結果多くの歴史的遺産が培われ，今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から，福岡市・福岡市教育委員会では，市内の遺跡把握に努め，時には発掘調査を行なって，往時のあり様を後世に伝えています。

本書は，平成29・30年度に行ないました，博多遺跡群第212・219次調査の成果について報告するものです。この調査では中世後半から近世にかけての多くの遺構を確認することができました。本書が市民の皆様の埋蔵文化財，ひいては地域の歴史に対するご理解の一助となり，また考古学上，地域史上の研究資料としてご活用いただければ幸いです。

また，最後になりましたが，今回の調査において，費用の負担等多くのご協力をいただきました，株式会社ワコーエステートをはじめとする関係各位に深く感謝いたします。

令和２年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

—例　言—

・本書は，福岡市が平成29・30年度に調査を行なった，博多遺跡群第212・219次調査（博多区下呉服町）の報告である。
　調査は藏冨士寛が担当した。
・調査地点及び期間は以下の通りである。
　第212次調査（博多区下呉服町406番１他）：平成29年６月14日～平成29年９月15日
　第219次調査（博多区下呉服町422・423番）：平成30年４月２日～平成30年５月25日
・本書の執筆，編集は藏冨士が行ない，遺物の実測は井上加代子による。
・一部の遺物について，下記の方々による助言を受けた。記して感謝したい。
　加藤良彦　田中克子　徳永貞紹　山崎龍雄
・本書における方位は座標北であり，遺構には，SK（土坑），SD（溝），SE（井戸），SP（柱穴）等の略号を使用している。
・本書に関わる資料は，この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目　次

Ⅰ　はじめに…… 1

1．調査に至る経緯…… 1

2．調査の組織…… 1

Ⅱ　位置と環境…… 2

Ⅲ　調査の記録…… 4

1．調査の方法…… 4

2．層序…… 4

3．遺構・遺物…… 6

Ⅳ　まとめ…… 33

挿図目次

図1　博多遺跡群（1/25,000）…… 2
図2　周辺の調査（1/2,000）…… 3
図3　調査区位置（1/400）…… 3
図4　土層（1/80）…… 4
図5　遺構配置（1/160）…… 5
図6　石積土坑1（1/40）…… 7
図7　石積土坑2（1/40）…… 8
図8　石積土坑3（1/40）…… 9
図9　石積土坑4（1/40）…… 10
図10　石積土坑出土遺物（1/4，1/3）…… 12
図11　礎石を持つ土坑（1/40）…… 13
図12　礎石を持つ土坑 出土遺物（1/4，1/3）…… 14
図13　集石土坑（1/40）…… 15
図14　その他の土坑〔212〕1（1/40）…… 16
図15　その他の土坑〔212〕2（1/40）…… 17
図16　SK120〔212〕（1/40，1/3）…… 18
図17　その他の土坑〔219〕（1/40）…… 19
図18　その他の土坑 出土遺物1（1/4，1/3）…… 21
図19　その他の土坑 出土遺物2（1/4，1/3）…… 22
図20　土坑出土遺物（1/4，1/3）…… 23
図21　SD083・090・111〔212〕，SD010〔219〕
（1/160，1/40）…… 24
図22　SD090〔212〕・010〔219〕出土遺物1
（1/4，1/3）…… 25
図23　SD090〔212〕・010〔219〕出土遺物2
（1/4）…… 26
図24　SD111〔212〕出土遺物（1/3）…… 26
図25　小溝・長方形土坑群（1/120，1/40）…… 27
図26　長方形土坑群出土遺物（1/4，1/3）…… 28
図27　柱穴群（1/80，1/40）…… 28
図28　柱穴列（1/100）…… 29
図29　井戸（1/400，1/3）…… 30
図30　その他の遺物1（1/4，1/3）…… 31
図31　その他の遺物2（1/3）…… 32
図32　第153・205・212・219次調査（1/600）…… 33

図版目次

図版1　①第212次調査区 東側全景（北東から）　②第212次調査区 東側全景南半（北東から）
③第212次調査区 東側全景北半（北東から）
図版2　①第212次調査区 東側全景（南西から）　②第212次調査区 北西側全景（南西から）
③第212次調査区 南西側全景（南東から）
図版3　①第219次調査区 北東側全景（南西から）　②第219次調査区 南西側全景（南西から）
③第219次調査区 南西側全景（北西から）
図版4　①柱穴・長方形土坑〔212〕（南東から）　②調査区北東側溝・石積土坑・土坑〔219〕（北西から）
③柱穴列〔219〕（南西から）
図版5　①SD090〔212〕（南東から）　②SD090〔212〕土層（南東から）　③SD111〔212〕（南西から）
図版6　①SK001〔212〕（南西から）　②SK063〔212〕（南東から）　③SK087〔212〕（南西から）
④SK115〔212〕（南西から）　⑤SK122・145〔212〕（南から）　⑥SK125〔212〕（南西から）
図版7　①SK004〔219〕（南東から）　②SK005〔212〕（南西から）　③SK005・017〔219〕（南東から）
④SK083〔219〕（北東から）　⑤SK084〔219〕（西から）　⑥SK085〔219〕（北西から）
図版8　①SK060〔212〕（北西から）　②SK080〔212〕（南東から）　③SK065〔219〕（南から）
④井戸群〔219〕（南東から）　⑤SK041〔212〕（西から）　⑥SK013〔219〕（北から）
図版9　①SK102・103・106〔212〕（東から）　②SK106・107・108〔219〕（北から）
③SK005・006・007〔219〕（南東から）　④SK065・066〔219〕（北西から）
⑤SK081〔212〕（南から）　⑥SK120〔212〕（北東から）
図版10　出土遺物
図版11　出土遺物

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

（1）博多遺跡群第212次調査

平成29（2017）年３月，株式会社ワコーエステートより博多区下呉服町406－１他における共同住宅建設に関して，埋蔵文化財の有無に関する照会がなされた（事前審査番号28-2-1054）。この地点は周知の埋蔵文化財包蔵地（博多遺跡群）内であることから，埋蔵文化財課では確認調査を行ない，現地表下200cmで遺構の存在を確認した。これを受け両者協議の末，工事による遺跡への影響は避けられないという結論に至り，遺跡の記録保存（発掘調査）が行なわれることとなった。発掘調査の開始は平成29（2017）年６月24日。同年９月15日にすべての作業を終了した。

（2）博多遺跡群第219次調査

平成29（2017）年10月，株式会社ワコーエステートにより，平成28年度照会分（事前審査番号28-2-1054）の隣地（博多区下呉服町422・423）を含む事業計画変更による照会がなされた（事前審査番号29-2-666）。平成28年度照会分については，すでに発掘調査が実施されており（第212次調査），両者協議の結果，隣地においても同様の対応（発掘調査）が採られることとなった。発掘調査の開始は平成30（2018）年４月２日。同年５月25日にすべての作業を終了した。

2．調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

博多遺跡群第212次調査

調査委託　株式会社ワコーエステート
調査主体　福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課　課長　常松幹雄　　調査第２係長　大塚紀宜
調査庶務　文化財部文化財保護課　松原加奈枝
調査担当　埋蔵文化財課　調査第２係　藏冨士　寛

博多遺跡群第219次調査

調査委託　株式会社ワコーエステート
調査主体　福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課
調査総括　埋蔵文化財課　課長　大庭康時　　調査第２係長　大塚紀宜
調査庶務　文化財活用部文化財活用課　松原加奈枝
調査担当　埋蔵文化財課　調査第２係　藏冨士　寛

博多２１２次

遺跡調査番号	1709		遺跡略号	HKT212	
地番	博多区下呉服町406番1他		分布地図番号	４８　千代博多	
開発面積	856.97㎡	調査対象面積	450㎡	調査面積	450㎡
調査期間	平成29年６月14日～平成29年９月15日				

博多２１９次

遺跡調査番号	1801		遺跡略号	HKT219	
地番	博多区下呉服町422・423番		分布地図番号	４８　千代博多	
開発面積	1257.44㎡	調査対象面積	250㎡	調査面積	250㎡
調査期間	平成30年４月２日～平成30年５月25日				

Ⅱ　位置と環境

博多遺跡群は，御笠川と那珂川にはさまれた博多湾岸の砂丘上に営まれた遺跡で，南北１km，東西0.4kmの広がりを持つ。古代末から中世を中心とし，弥生時代から近世に至る存続期間を有する複合遺跡である（図１）。博多遺跡群の立地する砂丘は，東西方向にのびる３つの砂丘列によって形成されており，通常内陸側の２列を「博多浜」，外側の１列を「息浜（おきのはま）」と呼ぶ。第212・219次調査は「息浜」の北東端部付近で実施したもので，第212次南東隣では第153次調査（小林編2007），第219次北西隣では第159次調査（田上編2018）が，それぞれ行われている（図２・３）。

第153次調査では，計２面の調査を行なっており，第１面（標高４m）で近世期，第２面（標高３m）で「室町後半期」の遺構が確認されている。ただ，第２面の遺構は，第１面における近世期遺構の影響により多くが失われており，当調査における主たる遺構は第１面における近世期のものとなる。第１面では，井戸，土坑（石積土坑等），柱穴などが確認されているが，大型建物の基礎と目される石列と，銅盤・銅瓶・鉄壺といった青銅・鉄製品を埋納した土坑の存在は特筆される。

第205次調査では標高2.6mから調査を開始し，１～２面の調査が行なわれた。井戸，土坑（石積土坑等），石基礎，溝，ピットが検出され，15世紀後半から16世紀を主とする多くの貿易陶磁が出土している。調査区の東端では，幅1.1～1.7mの大溝（SD79）が存在しており，その延長は今回の調査においても確認できた。第205次調査担当者は，これは区画溝と考え，これと並行する溝が第111次調査（佐藤編2002）でも確認されていることから，息浜の北東部，つまり元寇防塁の外側[註]の地域は，この軸を元に開発されたと考えている（田上編2018：74頁）。

文献　小林義彦編2007『博多112』福岡市埋蔵文化財調査報告書第942集　福岡市教育委員会
佐藤一郎編2002『博多85』福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集　福岡市教育委員会
田上勇一郎編2018『博多159』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1339集　福岡市教育委員会

註　第111次調査区で確認された石塁遺構は，元寇防塁である可能性が指摘されている。

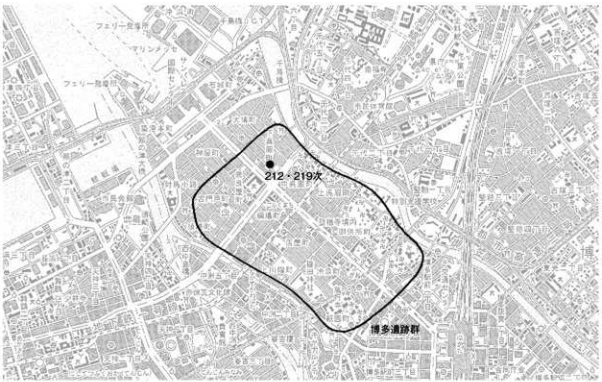


図１　博多遺跡群（1/25,000）

図2　周辺の調査（1/2,000）

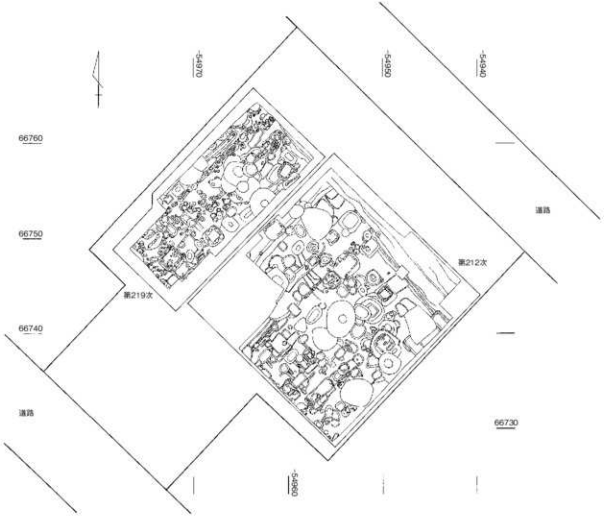


図3　調査区位置（1/400）

Ⅲ　調査の記録

1．調査の方法

第212，219次調査ともに，まず重機により現地表下２ｍ程の土砂撤取りを行ない，褐色砂質土を主体とする標高2.8m前後に調査面を設定し，作業を開始した（図４）。遺構を確認しながら手掘りによる数度の掘り下げを実施し，標高1.7～2.3m前後の暗黄～黄褐色砂質土上面（砂丘面）にて，記録の作成を行なった。したがって調査の記録は１面のみであるが，検出段階が同一とはいえないため，遺構本来の大きさにも若干のばらつきがある。ただ，第212次調査の表土剥ぎ中，標高3.3m付近で石積み土坑１（SK001）を検出したため，これのみ調査開始面上で調査を行なっている。いずれの調査も，掘削による排土は場内で処理しており，途中で数度の重機による土砂反転を行なっている。

2．層序

第212，219次調査いずれも，調査区周囲に土留めが施されており，土留め内すべての土砂の撤取りを行なったため，調査区内の土層の確認は行なっていない。限られた所見の中であるが，標高３ｍ前後に堆積する暗褐色砂質土中には近世段階の遺物が包含されており，近世より古い遺構が確認できるのは，その下の褐色砂質土上面からであるという判断に基づき，調査を行なっている。

第212・219次調査で確認できた砂丘面（暗黄～黄褐色砂層上面）は，ほぼ平坦であるが，より詳細には東側が高く，西側へ向かってわずかな傾斜をみせている（図４）。地勢上からすれば当調査地点はむしろ，北東側へ傾斜する砂丘縁辺部に位置しており，この矛盾は人の営為によるものか，微細な地形の起伏によるものか，判断がつかない。

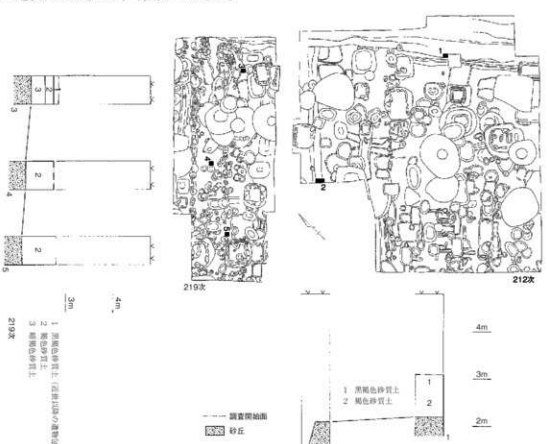


図４　土層（1/80）

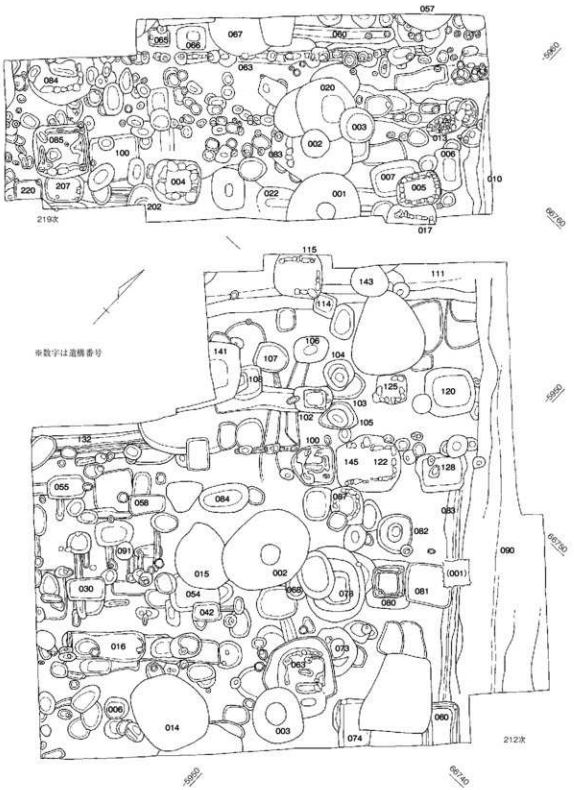


図5　遺構配置（1/160）

3．遺構・遺物

第212・219次調査では，土坑（SK），溝（SD），柱穴（SP）・柱穴列，井戸（SE）など，多くの遺構を確認することができた（図５）。いずれも中世後半から近世段階に位置付けることができる。以下では，各遺構について，その所見と出土遺物について述べる。

ところで，第212次，第219次調査では，それぞれに遺構の通し番号（001～）をつけている。重複を避けるため，遺構に関する記述の際には，遺構略号＋番号の後ろに調査次数〔212〕もしくは〔219〕を付し，遺構の所属する調査次数を明示することにしたい。

（１）土坑（SK）

今回確認した土坑には，略方・長方形，円・楕円形，不定形など，様々な平面形態のものが存在し，その深さもまちまちで，用途や機能を推測できるものは少ない。そこで，その中でも構造上の共通性を持つ，①石積み土坑，②礫石を持つ土坑，③集石土坑 については，調査次数に関わらず一括して取り上げることにし，④その他の土坑 に関しては，主要なものを選別し，調査次数・遺構番号ごとに，所見を記すことにしたい。

ところで，第212次調査区の南側を中心に，平面略長方形を呈する浅い土坑が多数存在しているが，周辺に存在する小溝と軸線をそろえ，関連性が窺われること，長大で溝状を呈するもの（SK016〔212〕）が存在することなどからこれら遺構は，（３）SD（溝）の項目にて取り上げることにする。

①石積土坑（図６～９）

地面を掘り込み，積み石により四壁を構築した土坑のことで，これまでの類例からは，地下蔵や便所といった用途が想定されている。第212次で９基，第219次調査で６基がある。平面形に着目すれば，Ⅰ：方形を呈するもの と，Ⅱ：長方形を呈するもの，に大別でき，Ⅰの中には内法の大きさが，(a)：一辺1.2m前後のもの，(b)：一辺1.5m前後のもの，(c)：一辺１m以下の小型のもの，といった大小関係がある。以下に所見を記す。

Ⅰ (a) 類：一辺1.2m前後のもの（図６・７）

SK115〔212〕

第212次調査区北西端で確認した。全形を明らかにするため，調査区を一部拡張している。南西壁の大半が失われているが，平面は1.3×1.2mの略方形と推測でき，軸線は北東－南西側（N－48°－E）に向く。壁面基底部には大型石材を横位に置き，その上に塊石を積み上げる。縦断面の土層観察をしたが，土坑掘り込みに対応した，一回り大きい掘削が認められ（５～９層），新たな土砂による整地が行なわれた可能性を考えておきたい。

SK063〔212〕

第212次調査区南東側で確認した。石積は，北西辺及び東隅のみ遺存するが，石材抜き跡からは一辺1.2m程の方形プランを想定できる。壁面の基底部には，やや大ぶりの石材を立てて使用しており，その方向から，軸線は北東－南西方向（N－43°－E）にあることが分かる。

SK083〔219〕

第219次調査区中央付近で確認した。南西壁のみが長さ1.2m程残存している。ここではⅠ(c)類としているが，さらに大型である可能性もある。壁面基底部に大型石材を横位に置き，その上に塊石を積み上げており，軸線は北西－南東方向（N－45°－W）。

SK122・SK145〔212〕

第212次調査区中央北寄りで確認した。遺存状況から，２基の土坑が切り合い関係にあると判断したが，これが妥当であるならば，築造順序は145→122となるだろう。122は1.2×1.2mの方形プラン，

145は1.3×1.2mの略方形プランを想定できようか。壁面基底部には大型石材を多く配し，横口もしくは小口を内側へ向けて使用している。各土坑の壁面は軸線をそろえており，北東－南西側（N－45°－E）を向いている。また，これら土坑の裁ち割りを行ない，縦・横断面の土層観察を行なったが，両者とも床面の周辺を掘削後に土砂を敷き詰めており，SK115〔212〕と同じく，新たな土砂による整地が行なわれた可能性がある。

Ⅰ(b)類：一辺1.5m前後のもの（図７）

SK084〔219〕

第219次調査区南西側に存在する。石積は西側にのみ平面「L」字形に残存し，南東側壁面は長さ1.5

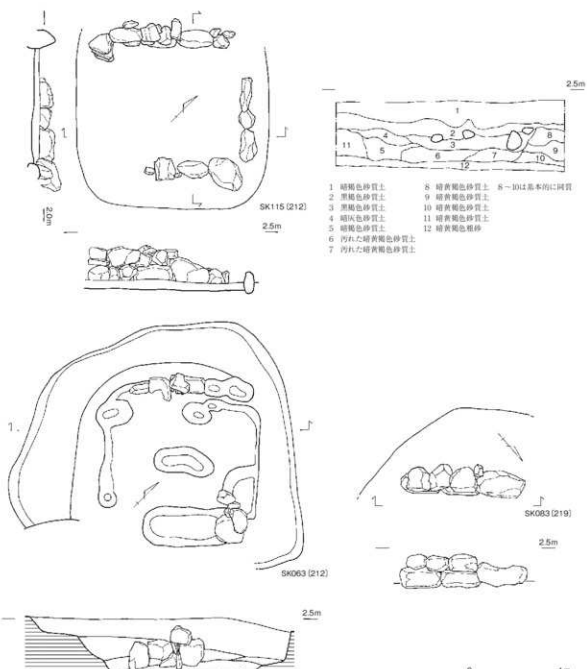


図６　石積土坑１（1/40）

m程である。この壁面は，北東－南西側（N－45°－E）を向いている。強い関連性を持つ，後述するSK085〔219〕の形態から，当土坑も一辺1.5mの方形プランを想定できるだろう。各壁体は基底の一段分のみが残り，Ⅰ(a)類と比しても格段に大きい石材を立てて使用している。床面は凹字状をなしており，新たな土砂を入れた整地が行なわれた可能性を考えておきたい。

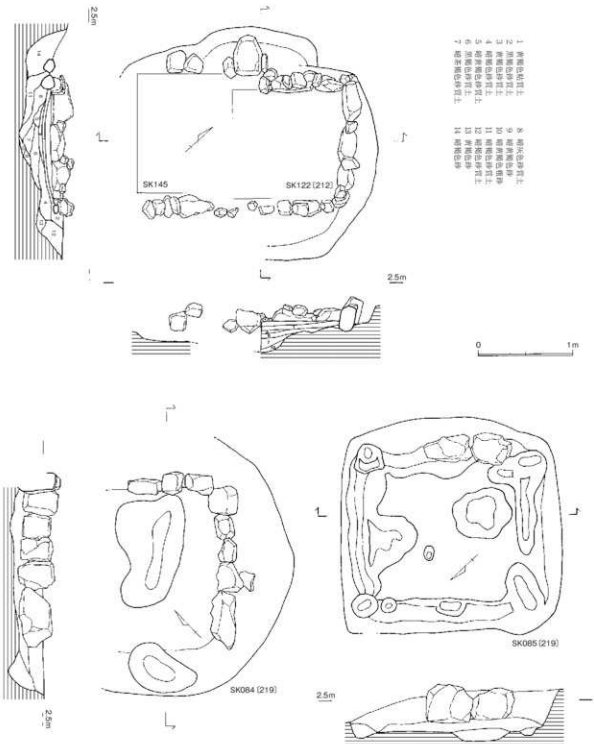


図7　石積土坑2（1/40）

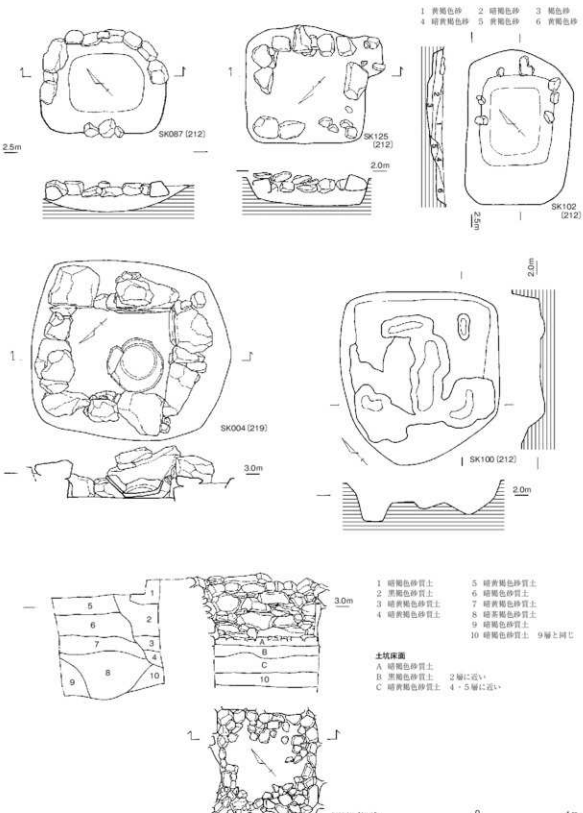

SK087 (212)
SK125 (212)
SK102 (212)
SK004 (219)
SK100 (212)
SK001 (212)
2.5m
2.0m
3.0m
1 黄褐色砂
2 暗褐色砂
3 褐色砂
4 暗黄褐色砂
5 黄褐色砂
6 黄褐色砂
1 暗褐色砂質土
2 黒褐色砂質土
3 暗黄褐色砂質土
4 暗黄褐色砂質土
5 暗黄褐色砂質土
6 暗褐色砂質土
7 暗黄褐色砂質土
8 暗茶褐色砂質土
9 暗褐色砂質土
10 暗褐色砂質土 9層と同じ
土坑床面
A 暗褐色砂質土
B 黒褐色砂質土 2層に近い
C 暗黄褐色砂質土 4・5層に近い
0
1m

図8　石積土坑3（1/40）

SK085〔219〕

SK084〔219〕の南西側に並列して存在しており，強い関連性が窺われる。軸線は北東－南西方向（N－43°－E）。石積は南東壁に２石が残るのみであり，遺存状況は悪いが，抜き跡からは平面は一辺1.5m程の方形に復元できるだろう。残る石材はいずれも大形で，立位で設置される。この土坑は石積土坑と判断しているが，抜き跡の四隅に柱穴状のくぼみがあり，この部分に柱を立てるなど，他と構造が若干異なっていた可能性も考えておきたい。

Ⅰ(c)類：一辺１m以下（0.9m前後）の小型のもの（図８）

SK087〔212〕

SK122・145〔212〕の南側に位置しており，その一部を切り込んでいる。平面形は，西隅部分が丸みを帯びているが，1.0×0.8mの略方形プランを呈する。軸線は北西－南東方向（N－47°－W）。壁体は１段分のみが残り，小振りな石材の横口・小口を内側へ向けて設置する。

SK125〔212〕

第212次調査区北寄りに位置する。石積には小振りな石材を用い，小口・横口を内側へ向けて設置する。壁体は南東側中心に遺存しており，これをみれば平面形は，一辺0.7m程の方形プランとみなすことができる。南東側壁面は，北東－南西方向（N－45°－E）に向く。

SK102〔212〕

第212次調査区の中央やや北寄りに位置する。0.9×0.7mの平面長方形を呈する土坑で，周囲に石材が散乱していたことから，石積土坑であった可能性を考えている。そうであれば，この土坑も底面の改良が行なわれていることになる。壁面の方向は北東－南西方向（N－45°－E）。

SK100〔212〕

第212次調査区の中央，SK122・145の南西隣に位置する。方形の掘方が確認できるのみで石積は全く残っていないが，周囲に石材が散乱することやSK122・145と並列して存在することから，石積遺構である可能性を考えた。土坑掘方内には，石材の抜き跡を思わせる痕跡があり，これらを参考にすれば，一辺0.7～0.8m程の平面方形プランを想定することができようか。

SK004〔219〕

第219次調査区の中央南寄りに位置する。今回報告の他に比して，特に大型の石材を使用しており，内側に横口を向けて設置する。1.0×0.9mの平面略方形プランであり，主軸は北東－南西方向（N－42°－E）。土坑西隅に大甕を据え，近世後半以降の陶磁器等が大量に廃棄されていた。

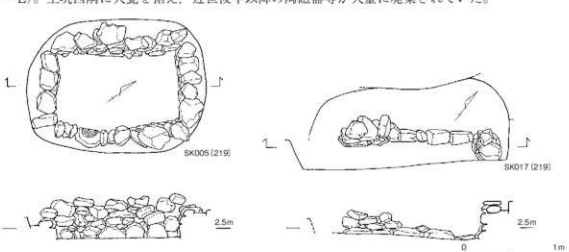


図９　石積土坑４（1/40）

SK001〔212〕

第212次調査区北東側に位置する。標高2.6m前後で検出した他遺構とは異なり，標高3.3m付近で確認した遺構である。各壁体とも，高さ50～60cmの石積みが残っており，遺存状況は良い。底面は一辺1.0mの方形プランであり，軸線は北東－南西方向（N－43°－E）。壁体積み石は，石材の横口を内側へ向けて配置しており，最下段にやや大型の石材を優先して使用する。床面には敷石を配しており，土坑掘方の底面はこの床面よりも低く，土坑構築の際に底面土砂の入れ替えが行なわれている。

Ⅱ類：長方形を呈するもの（図9）

SK005〔219〕

第219次調査の東側に位置する。壁体は高さ0.4m程あり，他に比して遺存状況は良い。石積みには小振りな石材を使用しており，最下段にはやや大き目の石材を立位に配する。床面は1.3×0.75mの長方形プランであり，主軸の方向は北東－南西方向（N－37°－E）。なお，壁材に石臼1の使用が認められた。下臼で，臼面には八分割のすり目を入れている。阿蘇石製だろうか。

SK017〔219〕

SK005〔219〕の東隣に位置しており，掘方の一部を，SK005に切られている。調査区内では，平面「L」字形の石積みを確認しており，残りは調査区外に存在する。平面形は不明だが，全容の分かる北東側の壁面は長さ1.4m程あり，隣接して存在し，類似した構造を持つSK005と同程度の規模を想定しておきたい。壁体に小振りな石材を用いるのは，SK005と同様だが，最下段の石材を平置きしている点は異なる。

出土遺物（図10）

1・2はSK063〔212〕出土で，いずれも朝鮮白磁皿。1は口径（復元）9.9cm，2は口径（復元）13.6cm。1の口縁部全体には煤が付着する（図版10）。3はSK087〔212〕出土で，朝鮮白磁皿。口径（復元）13.6cm（図版11）。4～6はSK102〔212〕出土。4は瓦質土器で，火鉢の口縁部片。5・6は土師器杯。5は口径（復元）11.6cm・底径5.6cm，6は底径4.2cm。7・8・10・11は，SK100出土。7・8は土師器皿で，7は口径9.6cm・底径6.6cm，8は口径9.4cm・底径6.2cm。10は瓦質土器で，擂鉢口縁部片。口縁端部内側を断面半円形に肥厚させる。11は陶器の擂鉢で，内面のすり目は6本単位。底径（復元）14.0cm。9はSK122〔212〕出土で，青花碗の底部片。高台径（復元）5.6cmで，畳付は露胎。12はSK084〔219〕出土で，瓦質土器の茶釜。埋土の上面で検出したものである。底部を欠損し，口径14.4cm。外面全体に煤が付着する。13はSK085〔219〕出土の陶器鉢。平底で胴部は丸みを持ち，口頸部は短く外側へ外反する。口径（復元）21.6cm・底径14.0cm。釉は褐色を呈し，外面下半は露胎で胎土は赤褐色である（図版10）。

所見

石積遺構から出土した遺物は，遺構廃棄時に埋土の中へ混入したもので，多くは遺構に共伴するものではない。時期の決め手に欠くが，SK001〔212〕は検出レベルの高さから近世段階に位置付けられる可能性が高い。SK001〔212〕の床面は，標高2.7mと他の石積土坑床面に比して高く，これと標高を同じくするSK004〔219〕も内部に近世後半～近代にかけての陶磁器が大量に廃棄されていた状況からみて，SK001〔212〕と同じく近世段階に相当するものだろう。その他の石積土坑は，出土遺物からみて，15世紀後半～16世紀の範疇で収まる可能性が高いと考えるが，その配置を考えれば再考する余地もある（Ⅳまとめ参照）。

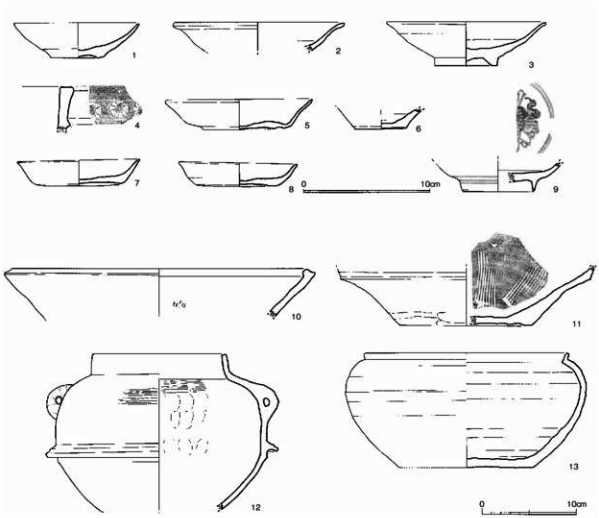


図10　石積土坑出土遺物（1/4，1/3）

②礎石を持つ土坑（図11・12）

土坑掘方内に平石を設置した土坑を，第212次調査で３例，219次調査で１例確認した。博多遺跡群では，掘方の四隅に柱を立て，板壁を巡らせた遺構が確認されており，その類似性からこれら平石は礎石であると考えて良い。礎石の配置をみれば，Ⅰ：土坑の四隅に礎石を配するもの，Ⅱ：中軸線上の壁際近くに礎石を配するものがある。Ⅰには土坑の平面形態が，(a)：長方形のもの，(b)：方形のものの２種がある。以下にそれぞれの所見を述べる。

Ⅰ(a)類（図11）

SK060〔212〕・SK074〔212〕

第212次調査区東端に位置し，一部は調査区外へ続く。SK060とSK067は，ほぼ同規模で並列して存在しており，強い関連性を窺うことができる。軸線は北東－南西方向（N－44°－E）。全形は不明だが，両者とも平面長方形を呈する可能性が高く，SK060は短辺1.6m，長辺1.8m以上，SK067は短辺1.4m，長辺２m以上を測る。攪乱と未調査により不明な点もあるが，SK060は土坑北隅，SK067は西隅に礎石が残っており，本来は四隅に礎石を有していたのではないか。

Ⅰ(b)類（図11）

SK080〔212〕

第212次調査区中央東寄りに位置する。平面は1.4×1.3mの方形プランであり，四隅に礎石が確認できた。壁の周囲は溝状の落ち込みがあり，礎石はその中にある。

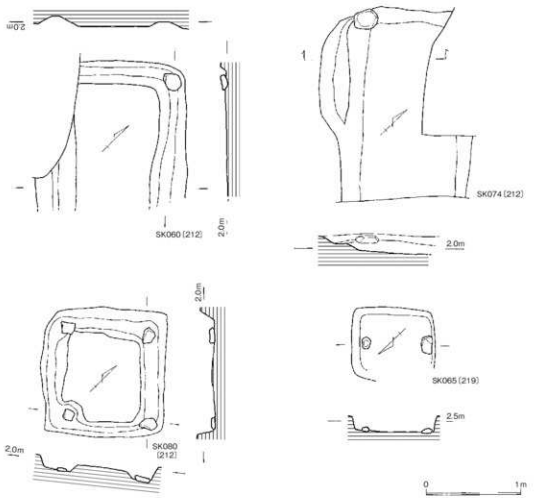


図11　礎石を持つ土坑（1/40）

Ⅱ類（図11）

SK065〔219〕

第219次調査区の西端に位置する。小型の土坑で，平面は0.9×0.7mの略方形プランを呈する。軸線は北東－南西方向（N－42°－E）。底面は平坦で，北東側の礎石はやや小ぶりである。

出土遺物（図12）

図12はすべてSK074出土であり，その他の土坑は土師質土器や土師器，陶磁器の小片が出土するのみである。1・2・4は龍泉窯系青磁。1は碗で，外面に片切彫による鎬蓮弁文を施す。2は小碗で内面に蓮弁文。4は碗底部片で，高台内及び畳付は露胎。3・5～7は朝鮮陶磁。3は皿で，口径9.3（復元）cm。器面は灰白色を呈する。5は白磁碗で，器面は淡黄色を呈する。6は粉青沙器の碗で，全面に施釉され，外面上部及び内面には白泥の刷毛塗をしている。壁面はオリーブ黒色（図版10）。7は皿の口縁部片で，口径（復元）10.4cm。器面は淡灰色を呈する。8～10は青花。8は皿の口縁部片で，外面上半に波濤文，下半に芭蕉葉文を施す。9は青花碗の口縁部片（図版10），11は青花皿の底部片。10は白磁で皿の底部片。12・13は瓦質土器の足鍋。14・15は土師質土器。14は釜，15は鍋で，いずれも外面に煤が付着する。16・17は陶器の擂鉢。その他，土錘も出土している（図31－14～16）。

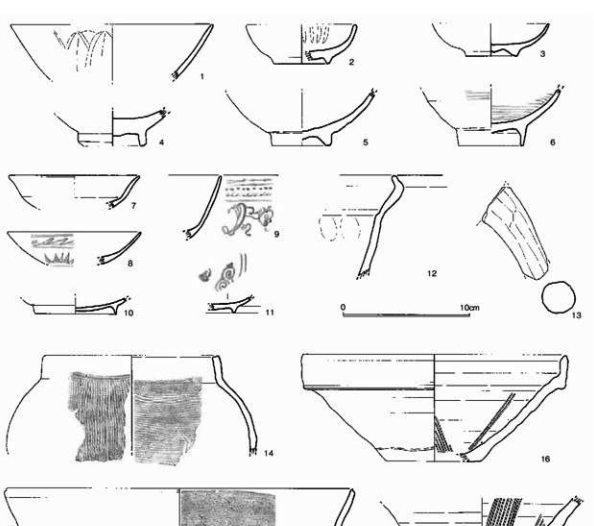


図12　礎石を持つ土坑 出土遺物（1/4，1/3）

③集石土坑（図13）

土坑の中に，礫が大量に入れ込まれたもので，第212，219次調査で，１例ずつ確認した。遺物は土師器や土師質土器，陶器の破片が出土するのみ。

SK091〔212〕

第212次調査区中央南寄りに位置する。径0.7～0.8mの円形の土坑で，深さは0.7mを測る。掘り込みは垂直に近い。土坑内すべてに礫が充填されており，小礫もかなりの割合で含まれている。

SK013〔219〕

第219次調査区北側に位置する。長さ1.5m，幅0.8mの土坑で，底面は狭く，すり鉢状を呈している。礫は0.8×0.7mの平面方形の範囲に深さ0.2m程敷き詰められており，土坑の底面には及んでいない。礫は整然と平滑に敷き詰められている印象を受ける。

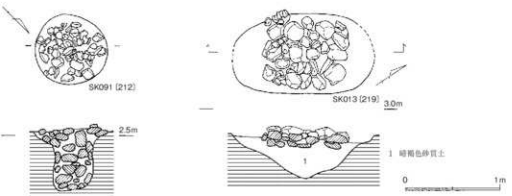


図13　集石土坑（1/40）

④その他の土坑（図14～19）

SK073〔212〕（図14）

第212次調査区東側に位置し，SK063に切られている。平面は径２m程の円形を呈し，掘方南東側はわずかに段をなしている。壁面の立ち上がりは緩やかで，ややすり鉢気味を呈する。深さは0.5mを測り，底面は平坦である。

SK081〔212〕（図14）

第212次調査区東側に位置し，SK080の北東側を切り込んでいる。平面は1.8～２mの方形を呈し，壁面は垂直近くに立ち上がる。深さは0.2m程で，底面は平坦である。埋土は褐色砂質土で均一。出土遺物も少ない。同様の埋土の状況を示す遺構にSK141〔212〕やSK100〔219〕がある。

SK078〔212〕（図14）

第212次調査区中央東寄りに位置する。上面の攪乱が著しく，遺構の把握に手間取り，図は砂丘面近くでの状況となっている。２段の掘り込みが行なわれており，最下段の掘方は平面1.4×0.8mの長方形を呈している。周辺に石材が多く散乱しており，石積土坑であった可能性もある。

SK084〔212〕（図14）

第212次調査区中央に位置する。平面は長さ2.2m，幅1.2mの長楕円形を呈する。壁面の立ち上がりは急で，底面は平坦であり，深さは0.5mを測る。

SK013・SK014〔212〕（図15）

第212次調査区中央北寄りに位置する。SK013とSK014は切り合い関係にあり，SK013はSK014に後出する。また，SK014は南側をSK102に切られている。SK014は，長さ1.6m，幅１m程の平面楕円形を呈する。深さは１mで壁面の立ち上がりは急であり，底部の平坦面も比較的広い。

SK013は径1.3mの平面円形を呈し，深さは0.5mを測る。壁面はわずかに段をなしており，これは径１m，深さ0.8m程の円形土坑（番号無し）が切り込んだ結果と判断している。したがって，この部分には，深い円形土坑が３回，掘削されていたことになるだろう。

SK105〔212〕（図14）

第212次調査区中央北寄りに位置し，SK013・014の東側に隣接する。一部をSK102に切られている。平面は不定形で，２段の掘り込みを有している。これは他遺構の切り込みである可能性もある。

SK106〔212〕（図15）

第212次調査区北西側，SK103・104の西側に位置する。長さ1.5m，幅1.1mのやや隅丸長方形気味の平面形を有し，深さは1.1mを測る。壁面の立ち上がりは急で，底面は平坦である。SK014〔212〕と類似する。

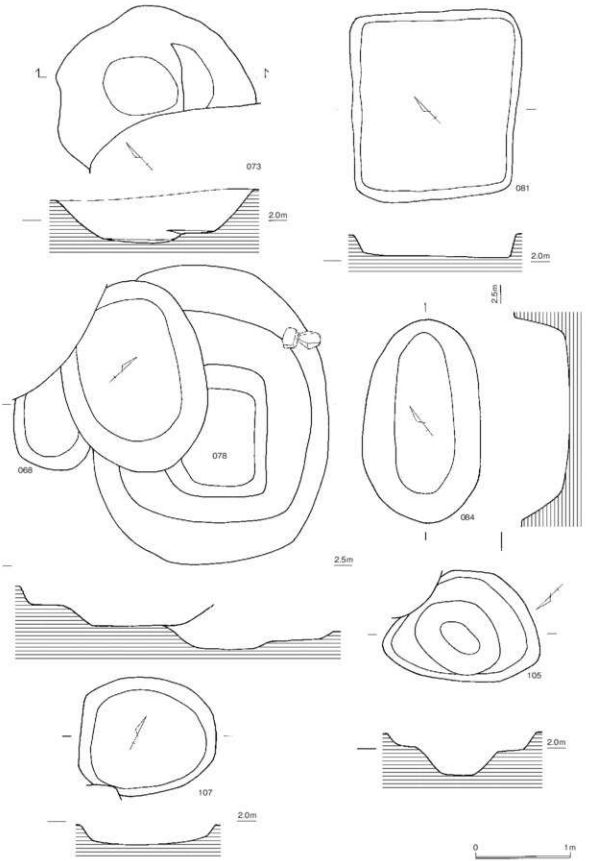


図14　その他の土坑〔212〕1（1/40）

SK107〔212〕（図14）

第212次調査区の西側，SK106の南側に位置する。平面は1.3～1.5mのいびつな円形を呈する。深さは0.2m程で，底面は平坦である。

SK120〔212〕（図16）

第212次調査区北側に位置する。平面は一辺２m程の隅丸方形で，深さは0.6mを測る。底面は平坦だが西側隅部に大きな窪みがある。底面の平面形も方形基調で，各辺も直線的であり，本来は方形土坑であった可能性が高い。木枠を持つ可能性も考えたが，土層の上では確認できなかった。

SK128〔212〕（図15）

第212次調査区北側に位置する。土坑東側が削平されているが，長さ2.2m，幅1.8m程の平面長方形を呈するものとみなすことができる。深さは0.2m程で，遺存状況は悪い。底面は平坦である。

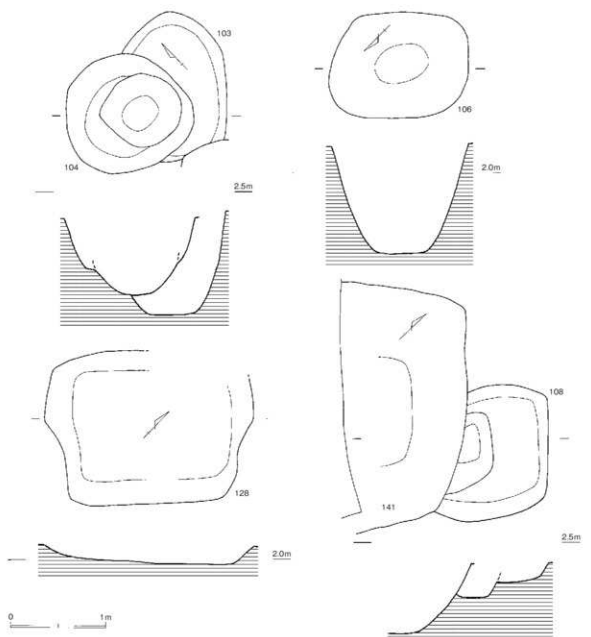


図15　その他の土坑〔212〕２（1/40）

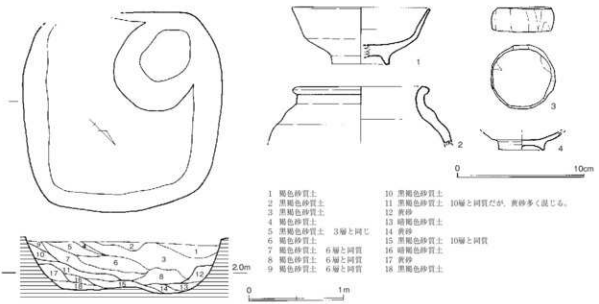


図16　SK120〔212〕(1/40，1/3)

SK141・SK108〔212〕（図15）

第212次調査区西端に位置する。SK108はSK141に切られている。SK108の平面は乱れているが，直線的な北東辺をみれば，一辺1.2m程の方形プランであった可能性が高い。遺存状況は悪く，深さは0.2m程である。SK141は一辺2.2mの方形，もしくは長方形の土坑であり，深さは0.7mを測る。埋土は褐色砂質土で均一であり，SK081に似る。

SK006〔219〕（図17）

第219次調査区北東側に位置する。南側をSK005に切られている。平面は長さ1.8m，幅1.1mの長方形を呈し，深さは0.5mを測る。底面は平坦である。平面の主軸は，SK005そして後述するSK007と直交しており，何らかの関連がある可能性も考えておきたい。

SK007〔219〕（図17）

第219次調査区北東側に位置する。北東側をSK005に切られている。平面は長さ2.1m，幅1.4mの長方形を呈し，深さは0.5mを測る。底面は平坦。形状がSK006に類似する。

SK022〔219〕（図17）

第219次調査区東端に位置する。北側をSE001に切られており，全形は不明だが，長さ1.7m，幅1.3m程の平面楕円形を想定できようか。深さは0.8mを測り，壁面の立ち上がりは急である。

SK066〔219〕（図17）

第219次調査区西端，SK065の北隣に位置する。平面は長さ1.2m，幅1.0mの略方形プランで，深さは0.7mを測る。底面は平坦である。第219次調査区内では，SK022との共通点が多い。

SK100〔219〕（図17）

第219次調査区の南側，SK085の北隣に位置する。平面は一辺２mの方形を呈する。SK085と並列しており，互いに関連するものである可能性もある。深さは0.5mを測り，底面は平坦である。遺構上面そして底面とも各辺は直線的で，壁面の立ち上がりも垂直に近く，掘削時の姿をよくとどめる。埋土は褐色砂質土で均一であり，SK081〔212〕，SK141〔212〕，後述のSK220と類似する。

SK202〔219〕（図17）

第219次調査区の南東端部，SK004の南隣に位置する。西側の一部のみを確認，調査しており，全体は円形基調の平面形を呈するものか。２段の掘り込みを有する。

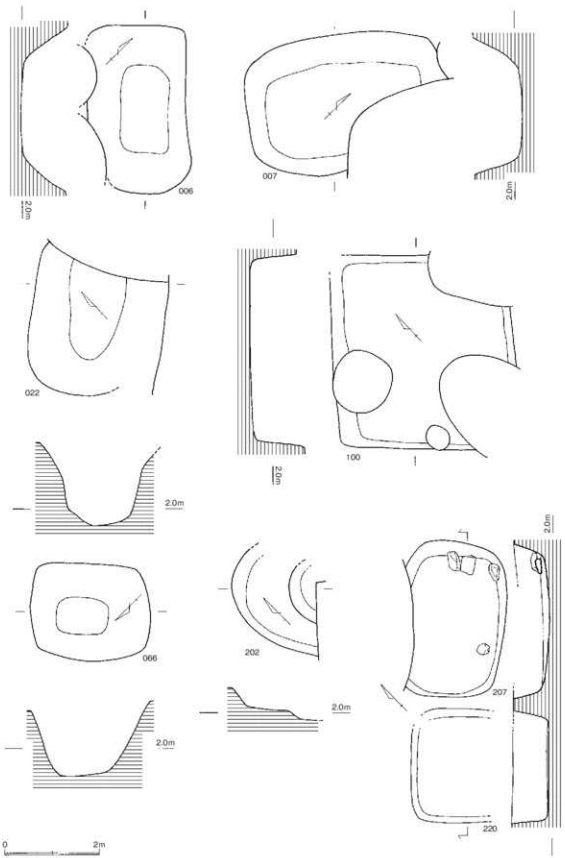


図17　その他の土坑〔219〕(1/40)

SK207〔219〕（図17）

第219次調査区南端に位置する。西側の一部をSK085に切られている。平面は長さ1.6m，幅1.1m程の長方形を呈する，深さは0.3mを測り，壁面の立ち上がりは急で，底面は平坦である。北東側の底面付近には数点の礫が認められた。

SK220〔219〕（図17）

第219次調査区南端，SK207の南側に位置する。東側の一部が調査区外へと続いており，全形は不明だが，平面は一辺1.2m程の方形を呈するものだろうか。深さは0.4mを測り，底面は平坦である。遺構上面そして底面とも各辺は直線的で，壁面の立ち上がりも垂直に近い。埋土は褐色砂質土で均一であり，先述のSK100〔219〕と類似する。

出土遺物（図16・18～20）

各土坑より出土した主な遺物について記す。図18－１～５はSK084〔212〕出土。いずれも白磁皿の小片。図18－６～19はSK106〔212〕出土。６～８・10～12は青花。６～８は碗で，８は外面に唐草文を描く（図版10）。10～12は皿。12は菊皿で，高台内には「天下太平」の文字がある（図版10）。９は朝鮮陶磁。白磁碗で，器面は淡黄橙色を呈する。口径（復元）13.8cm。13は中国陶磁だろうか。碗で外面はにぶい紺色を呈する。14～16は土師器。14は皿で，平面楕円形を呈しており，片口風に変形させている。口部には煤が付着する。15・16は杯で，15は口径10.8cm・底径4.9cm，16は口径（復元）10.4cm・底径5.4cm。17は瓦質土器で，擂鉢の口縁部片。口縁付近はわずかに肥厚し，端部は面をなし水平に仕上げられる。18は須恵質の甕の口縁部片。口頸部は直立し，口縁部は内側へ肥厚する。19は土師質土器の鍋。内・外面の下方には煤が付着している。

図19－１はSK105〔212〕出土。龍泉窯系青磁の盤で，内面には蓮弁文を施す。図19－２～４はSK103〔212〕出土。２は青磁の壺で，外面にヘラ描きによる文様を施す（図版10）。口縁内側は露胎だが，黒色を呈している。意図して着色されたものか。３は龍泉窯系青磁で，碗の高台部片。４は朝鮮陶磁で，碗の底部片。器面は暗灰色を呈する。図19－５・６はSK108〔212〕出土で，いずれも土師器の杯。図19－７・８はSK073〔212〕出土。７は脚付杯で，口径16.0cm，脚部径11.2cm（図版10）。８は土師質土器の鍋。９～11はSK078〔212〕出土。９は朝鮮陶磁で，白磁の碗（図版10）。10は土師質土器で，深鉢の口縁部片。器面は橙色を呈し，口縁端部の外側には浅い凹線を巡らす。11は土師質土器の擂鉢で，器面は橙色。

図16はSK120〔212〕出土。１・４は朝鮮陶磁。１は碗で，全面に施釉し，白泥による刷毛塗を施す。４は白磁皿で，高台径3.6cm。器面は淡黄橙色を呈する。２は陶器の甕口縁部片で，外面を中心に自然釉がかかる（図版10）。３は瓦玉だろうか。土師質。

図19－12～17はSK022〔219〕出土。12は陶器の蓋（図版10）。天井部と体部の境に２凹線を巡らし，口縁端部は平坦面をなしている。口径（復元）21.0cm。外器面は暗赤褐色，露胎の内器面は赤褐色を呈する。13は須恵質の甕口縁部片。頸部上に円環を張り付け，口縁部となす（図版10）。14～17は土師器である。14は碗（図版10），15・16（図版10）は杯，17は皿である。図19－18～23はSK202〔219〕出土で，いずれも土師器である。18～21は杯，22～24は皿である。

図20には，実測図を示していない，その他の土坑出土の遺物を示す。１は龍泉窯系青磁の底部片で，SK006〔212〕出土。２は陶器底部片。壺だろうか。器壁は薄く，器面は暗灰色を呈する。SK068〔212出土〕。３は中国陶磁の白磁皿。４は朝鮮陶磁で，碗の底部片。全面に施釉し，白泥による刷毛塗を施す。３・４はSK114〔212〕出土。５は陶器の擂鉢。SK082〔212〕出土。

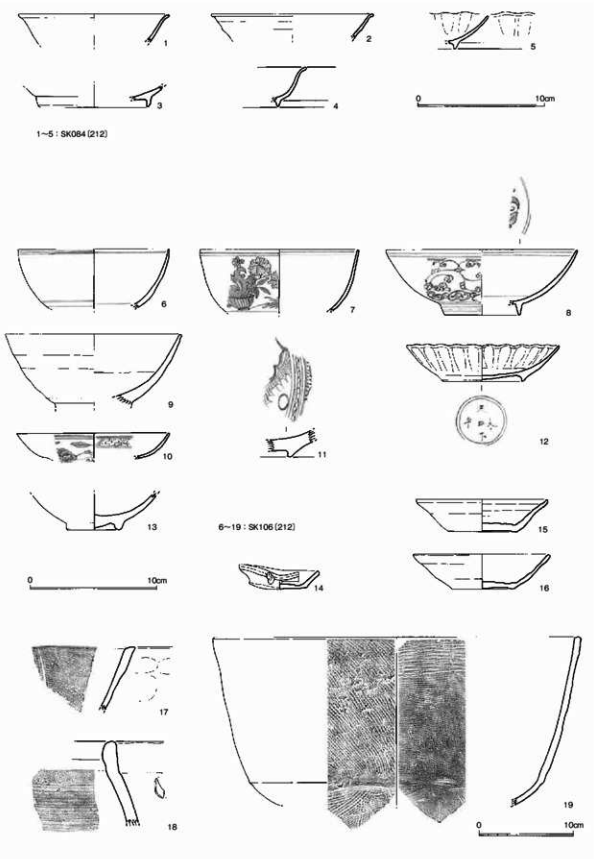


図18　その他の土坑 出土遺物1（1/4，1/3）

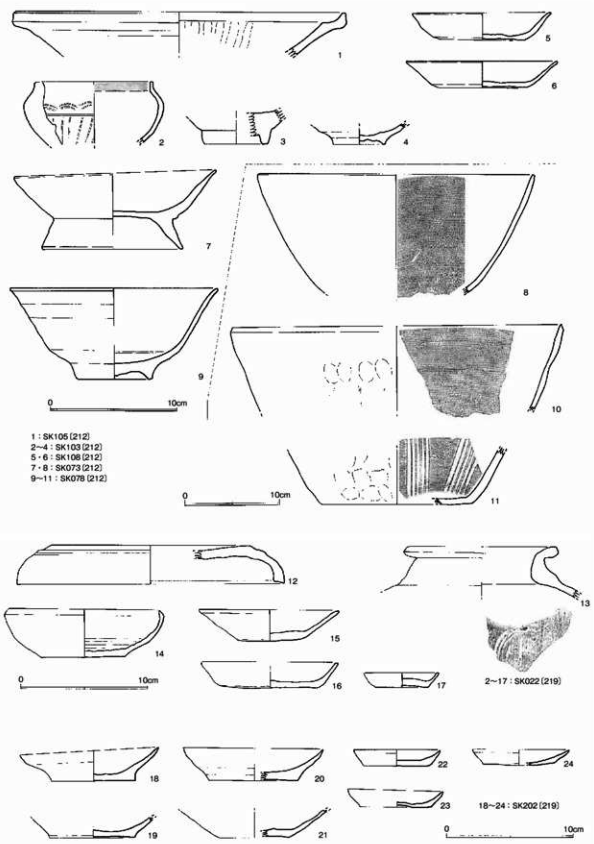


図19　その他の土坑 出土遺物２（1/4，1/3）

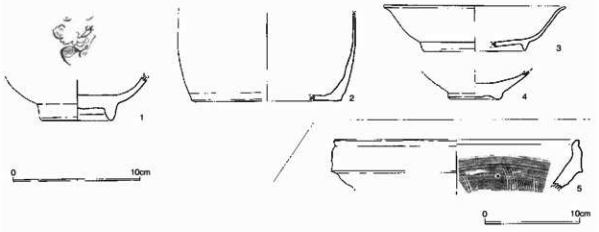


図20　土坑出土遺物（1/4，1/3）

（2）溝（SD）

第212・219次調査では様々な溝状遺構を確認できたが，特に注意を引くものとして，主に第212次調査区北側で検出された①大溝，第212次調査区南側を中心に存在する②小溝群 を指摘することができるだろう。①はSD090に代表されるもので，しっかりとした掘り込みを持って直線的に延びており，調査区の端々に至る十分な長さを確認することができる。②は掘り込みが浅く幅狭なもので，短い長さしか検出できないものが多く，その向きは直交する２方向のみという特徴がある。①・②いずれの溝も，北西－南東方向，もしくはこれに直交する北東－南西方向にのびるという共通性がある。

ところで，第219次調査区北西側に存在するSD062・060は，中に礎石を伴っており，（3）柱穴列として報告する。

①大溝（図21～24）

SD090〔212〕・010〔219〕，SD083〔212〕（図21）

SD090〔212〕は第212次調査区の北東端に存在する。北西－南東方向（N－40°－W）にのびており，第219次調査区の北東端で確認したSD010〔219〕と同一であると考えて良い。大半が調査区外にあり，第212次調査区北東隅部では幅3.1m，深さ1.3mを測る。溝の底面高（標高1.1m前後）は，調査区内に限りほとんど変化がない。溝は底面が幅狭で，斜面の傾斜の緩やかな断面「V」字形を呈する。溝の北東側斜面は，底面近くに傾斜変換線があり，断面土層図の検討から，これは溝の掘り返し跡であると考えている。これを含め，SD090〔212〕は計３回の掘り返し（①：１層，②：２～５層，③：６～９層）を想定することができようか（図21）。遺物からこれら掘り返しの時期を特定することはできなかった。また，このSD090〔212〕・010〔219〕は，南西側に並行して走る浅い溝（SD083〔212〕）がある。幅は0.5～0.6m程で，底面の標高は2.0m前後とほとんど変化がない。その位置関係から，SD083〔212〕はSD090〔212〕に関連する遺構と考えることができ，底面の標高が最終段階のSD090〔212〕（１層下面）とほぼ等しいことから，SD083〔212〕はSD090〔212〕を廃絶後に付け替えられた溝である可能性もある。なお，このSD083〔212〕は，土師質土器等の破片が出土するのみである。

SD111〔212〕（図21）

第212次調査区北西端に存在する。溝北西側の肩部は調査区外にあり，幅は確認できていない。溝は北東－南西方向（N－43°－E）にのびており，切り合い関係をみれば，直交するSD090〔212〕・010〔219〕に先行する。溝の底面は幅広く，調査区内では南西方向へ向かってわずかに浅くなっている。

溝南東側の斜面には傾斜変換線があり，これも再掘削の痕跡である可能性がある。また土層中には，粗砂による縞状の堆積を示すものがある（6層）。

出土遺物（図22・23・24）

図22・23にSD090〔212〕・SD010〔219〕出土の遺物を示す。図22－1・2・4・5・7・8は龍泉窯系青磁である。1・2・4・5は碗で，1・2は口縁部片，4・5は底部片。1は外面に雷文を施す。8は皿の底部片で，碁笥底。全面に施釉されている。

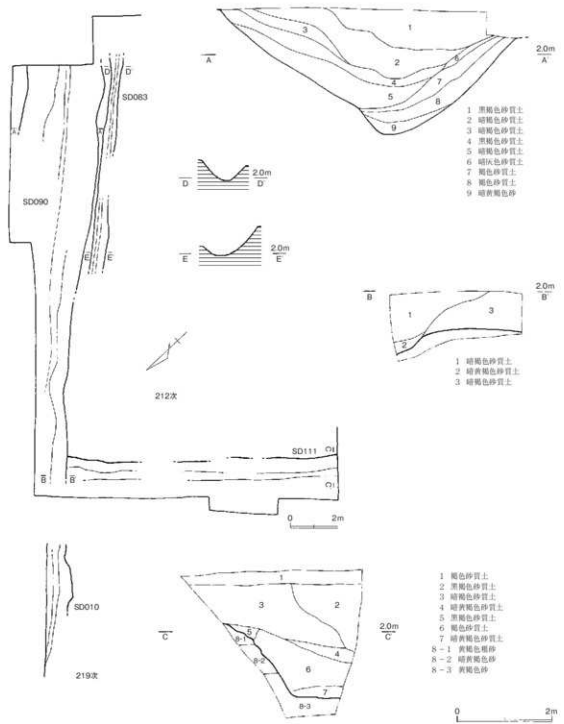


図21　SD083・090・111〔212〕，SD010〔219〕（1/160，1/40）

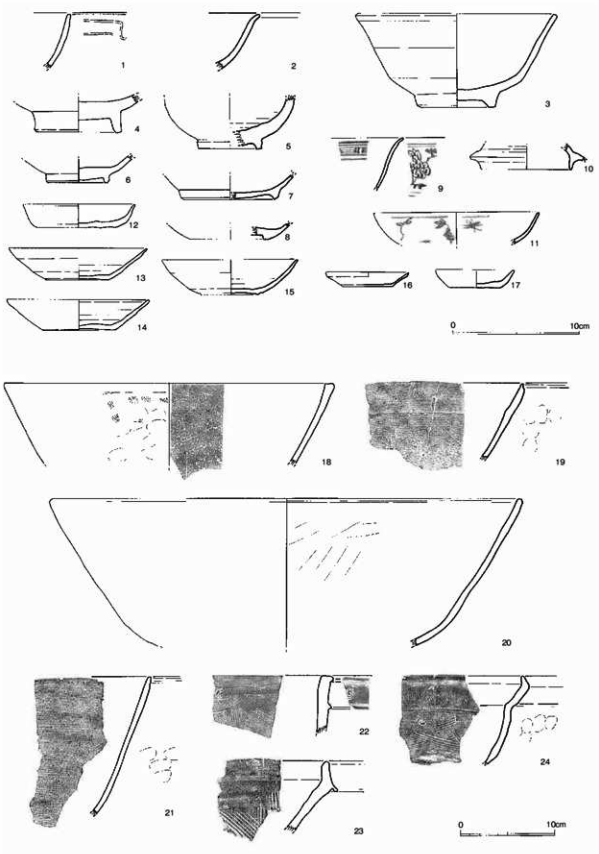


図22　SD090〔212〕・010〔219〕出土遺物1（1/4, 1/3）

図22－７は白磁碗の底部片。図22－９は青花。外面に花文，内面上部に雷文を施す。図22－３・６・10，図23－５は朝鮮陶磁。３は白磁碗で，口径（復元）15.6cm。６は壺で外面には白泥をかける。10は象嵌青磁の蓋。図23－５は粉青沙器の壺胴部片（図版11）。図22－11は肥前陶磁。図22－12～17は土師器で，13～15は杯，16・17は皿である。図22－18は土師質土器の擂鉢。図22の19・21は土師質，20は瓦質の鍋。図22－22は土師質土器の火鉢。２条の突帯間に渦文のスタンプを施す。図22－24は瓦質土器で足鍋の口縁部片。図23－１～３は瓦質の茶釜。図23－４は土師質，図22－23は陶器の擂鉢。

図24はSD111〔212〕出土遺物である。１は陶器壺の口縁部片。２は白磁の皿で，口径（復元）12.0cm。３は龍泉窯系青磁の底部片を用いた瓦玉。４は青花の皿。５は瓦質土器で深鉢口縁部片。２条の突帯の間に雷文のスタンプを施す。６は土師質土器の擂鉢。７は土師質の火鉢（図版11）。

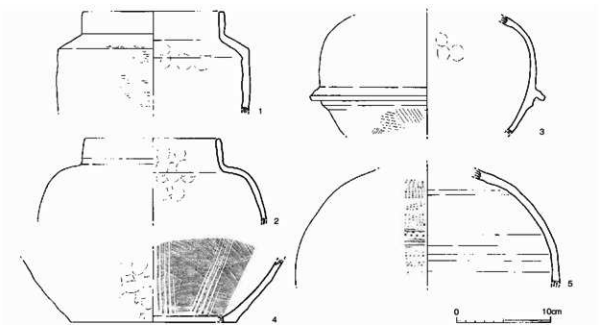


図23　SD090〔212〕・010〔219〕出土遺物２（1/4）

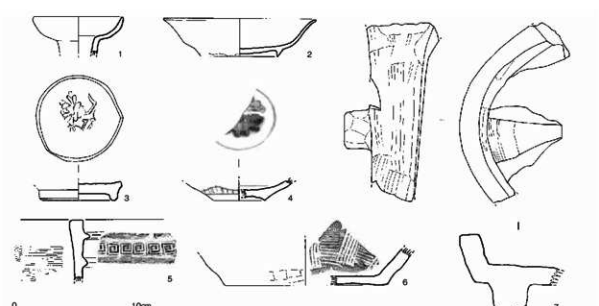


図24　SD111〔212〕出土遺物（1/3）

②小溝群（図25）

第212次調査区南側を中心に分布する。幅，深さとも0.1m前後が主体を占め，北東－南西方向（N－42°－E）もしくは直交する北西－南東方向（N－46°－W）に走るという共通性がある。長さの短いものが多いが，これは溝自体の遺存状況が悪く，調査時に全体を把握しきれていないためだろう。溝同士が接するものや間を置くものなど，溝間の距離は様々である。これら小溝の分布域をみると，長方形土坑が混在していることに気づく。この土坑も，主軸が北西－南東方向（N－46°－W）にあって溝と等しく，深さも0.1～0.3m程度と浅めのものが多い。切り合いをみれば，土坑は溝に後出するようだが，両者が関連する遺構である可能性も考えておきたい。

出土遺物（図26）

溝は土師質土器の小片等の出土のみであり，ここでは長方形土坑出土の遺物を示す。1は陶器で，壺の口縁部片。口径(復元)18.6cm。外面には灰緑色の釉がかかり，重ね焼きの痕跡が残る。SK042出土。2・3は朝鮮陶磁で，皿の底部片。器面は2が浅黄橙色，3が暗灰色を呈する。共にSK016出土。

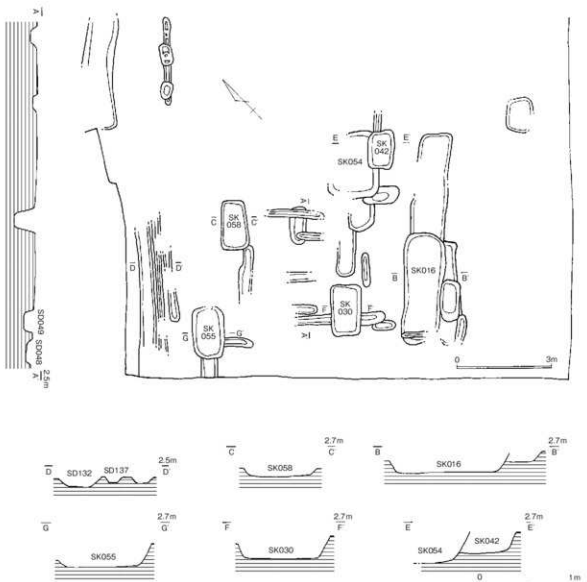


図25　小溝・長方形土坑群（1/120，1/40）

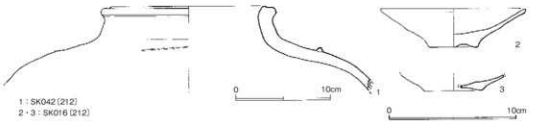


図26　長方形土坑群出土遺物（1/4，1/3）

（3）柱穴（SP）・柱穴列

第212・219次調査では，第219次調査区を中心に，多くの小穴を確認している。この中には，底面に平石を配しているものがいくつか存在しており，これら石材は柱材を支える礎石，そして礎石を持つ小穴は柱穴として判断して良いだろう。柱穴は第212次調査区南側に比較的集中しており（図27），また第219次調査区の柱穴は，多くが列状をなしているという特徴がある（図28）。そこで以下では，第212次調査区南側の①柱穴群，第219次調査区における②柱穴列について取り上げる。

①柱穴群（図27）

第212次調査区の南側では，礎石を持つ柱穴13を確認している。その配列から建物等の存在を窺うことは難しい。遺存状況は悪く，柱穴が深さ0.1mも満たずに礎石が表面に露出するものも多く，すでに失われてしまったものも存在するのだろう。礎石は平石を使用し，上面は特に平坦な部分を選択している。礎石上面の標高は，2.4～2.6mとまとまりがみられる。柱穴の埋土からは，土器の小片が出土しているが，時期の決め手に欠く。柱穴群が存在する場所は，小溝・長方形土坑群の分布する場所でもあるが，柱穴はこれら遺構を切り込んでおり，時期的に後出するようだ。

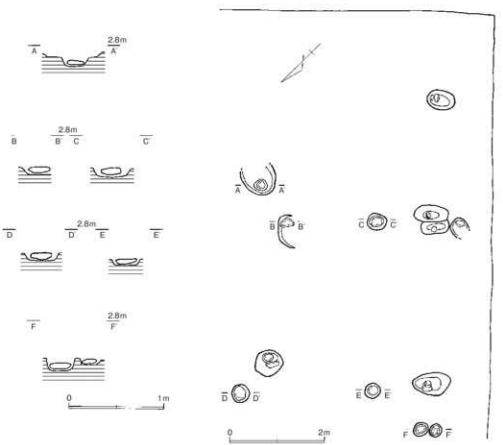


図27　柱穴群（1/80，1/40）

①柱穴列（図28）

第219次調査区で確認した柱穴列は２列ある。ここでは北西側を柱穴列１，南東側を柱穴列２とする。これら柱穴列はほぼ並行し，北東－南西方向（N－45°－E）にのびている。列上には，礎石を伴わない柱穴も存在しており，特に柱穴列２は半数を超えるものが礎石を持たない。

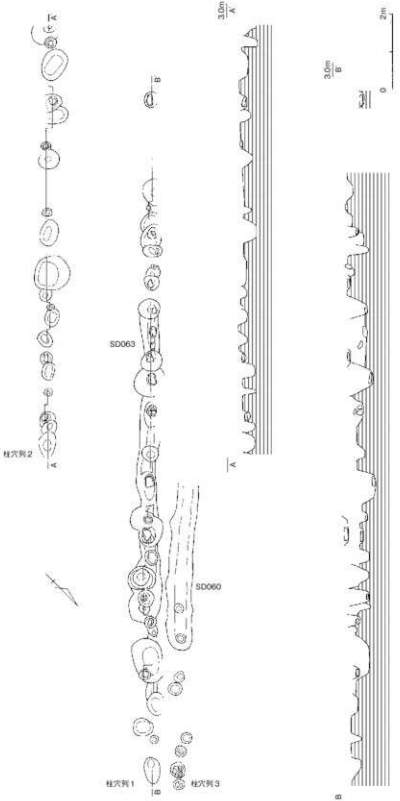


図28　柱穴列（1/100）

柱穴列１は長さ18mを確認した。列中ほどの長さ11m程には，布掘り状の溝を伴っている。礎石上面の標高にもばらつきがあるが，ａ：標高2.6m前後の浅いもの，とｂ：標高2.2m以下の深いもの，という大概な傾向が認められる。しかし，この両者のあり方にも規則性は認められない。柱穴列２は，１の南東側に幅2.7m程をおき，１と並行して長さ11mにわたって続いている。柱穴列１とは異なり，布掘り状の掘り込みを持たない。また，礎石の上面は標高2.6mで，１におけるａ類のみが存在する。柱穴の大きさはまちまちで，配列にも規則性を見出しえない。ところで，柱穴列１の北西隣には，平行する浅い溝がある（SD060〔219〕）。この溝の中には北寄りに小穴２があるが，溝の北東側延長線上４ｍ程には小穴６が直線的に並んでおり，その内の一つは礎石を持つ。これらも１と同様の柱穴列（柱穴列３）とみなす。これら柱穴列からの出土遺物は，量は少なく小片が多い。同様の例は，近隣では第111次調査において確認されており，第205次調査区北隅の土坑群も該当するものか。

（４）井戸（SE）

第212・219次調査では，合計11基の井戸を検出した（図29）。その内の６基（SE002〔212〕・003〔212〕・143〔212〕・001〔219〕・002〔219〕・004〔219〕）は井戸枠が瓦組の井戸である。いずれも近世段階に位置付けられる。

出土遺物（図29）

井戸から出土した，特記すべき遺物を示す。１は白磁の皿で，口径（復元）13.2cm。２は紅皿。外面には型押しによる蛸唐草文を施す（図版11）。３は朝鮮陶磁で，白磁の碗底部片。４は青花の皿。外面には波濤文と芭蕉葉文，見込みには蓮華文を描く（図版11）。５は龍泉窯系青磁碗の底部片。

（５）その他の遺物

①遺構以外出土の遺物（図30）

ここでは遺構に伴わない遺物を記す。１～３・６は龍泉窯系青磁の碗。１は見込みに印花文（図版11），２は「観○」の文字を施す。３は外面にヘラ描きによる細蓮弁文を施す。６の外面にも一部ヘラ描きの文様が残る。７は龍泉窯系青磁の底部片を用いた瓦玉。

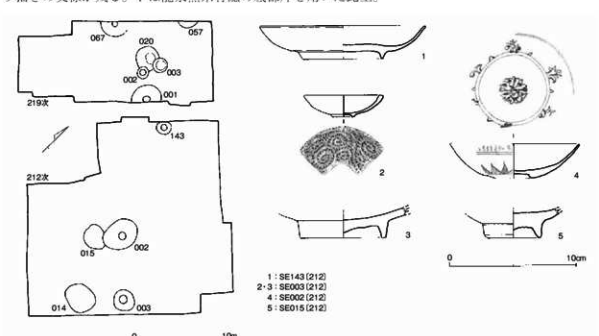


図29　井戸（1/400，1/3）

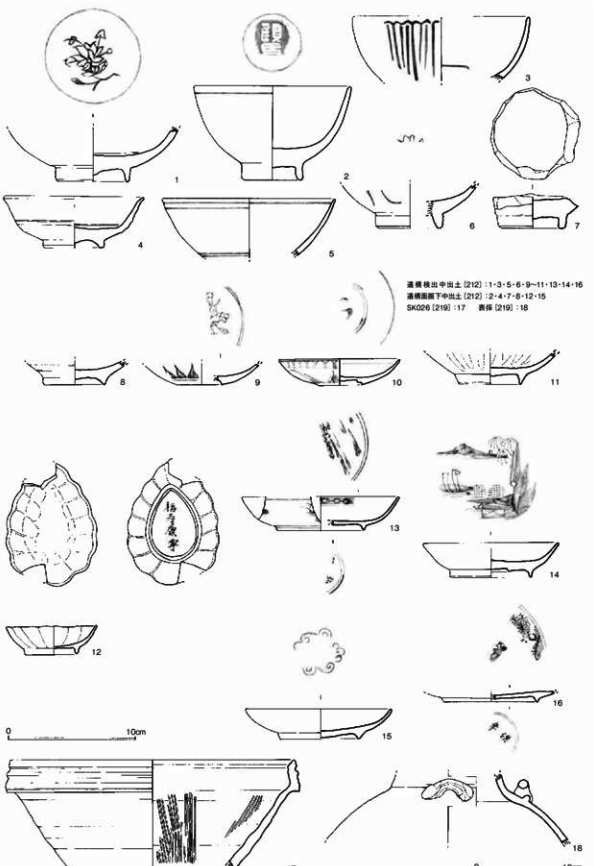


図30　その他の遺物 1 (1/4, 1/3)

4は白磁碗で，口径（復元）11.0cm，高台径4.6cm。5・9・10・13・16は青花。5は碗で，9・10は碁笥底の皿。12は白磁の皿で，高台内に「福寿康寧」の文字（図版11）。8は朝鮮陶磁の白磁で，器面は灰白色を呈する。11・14は肥前陶磁。11は青磁の菊形皿で，14は染付皿。15は陶器皿で，内面見込みに印花文を施す。釉はオリーブ色を呈する。瀬戸か（図版11）。17は陶器の擂鉢。18は耳壺の頸部片。器面は緑褐色を呈する。

②特記遺物（図31）

ここでは，特徴的な遺物について取り上げる。1・2は滋州窯系陶器の皿であり（図版11），3個体図示している。接点はないが，同一個体である可能性もある。内面に青釉，外面に黒釉の塗分けを行なう。3～5は華南三彩（図版11）。6～11は粉青沙器で白泥を刷毛塗するもの（6・7）と印花を施すもの（8～11）がある（図版11）。12～18は土錘。今回の調査では，土錘が多く，石錘はほとんど出土しなかった。長さ5cm前後の土錘が主で（12～17），より細いもの（18）も存在する。

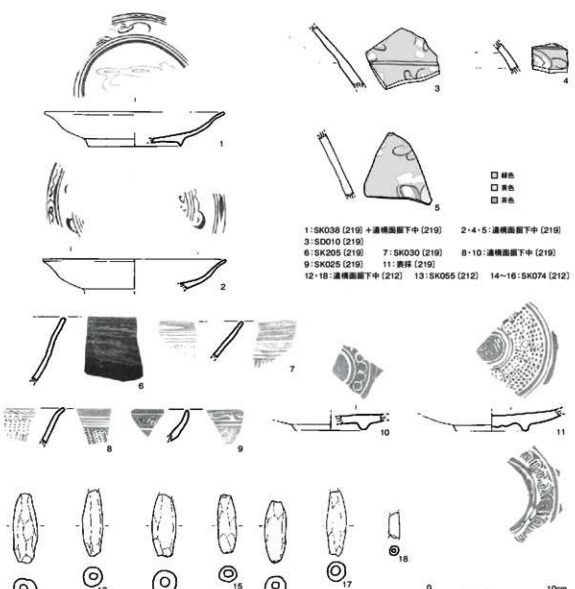


図31　その他の遺物2（1/3）

Ⅳ　まとめ

ここでは，第212・219次調査で得た成果と課題をまとめる。出土遺物は，15世紀後半から16世紀，そして近世段階のもので，ここで挙げた各土坑②～④は多くが中世後半に収まるものだろう。また，SD090〔212〕・010〔219〕やSD111〔219〕などの溝は，一部新しい遺物が出土しているが，これは混入の可能性が高く，大半，特に下層の遺物は中世段階のものに限られる。SD090〔212〕に関しては，例えば③の掘削などは近世段階になる可能性はあるが，基本的にこれら溝は16世紀代半ばには埋没した中世後半の溝と考えておきたい。

ここで問題となるのが，石積土坑や小溝群，柱穴・柱穴群などといった時期比定の決め手に欠ける遺構の取り扱いである。第153・205・212・219次調査で確認された瓦組の井戸は，間隔7.2m前後を単位とし直線的に並んでいるが，この線は調査区前後に面した道路と並行する。これら道路を含む「大博通り」などの今日における博多の町割は，中世の終わりに行なわれた「太閤町割」によって形成されているのだが，これを基準にこれら遺構をみれば，多くがこの町割軸に沿っていることが分かる（図32）。第205次調査の担当者は，15世紀後半～16世紀前半に埋没したSD79は区画溝であり，息浜の北東部はこれを軸に開発が行なわれた可能性を指摘する（第Ⅱ章参照）。この溝の延長線上にあたる，SD090〔212〕・SD010〔219〕の所見を加えれば，この溝は近世段階の町割よりわずか（6°）ではあるが，東へ傾くことが予想される。

第153・205・212・219次調査の成果を勘案すれば，①標高4m前後から近世段階，②標高2.5m前後から中世後半（15～16世紀）の遺構が確認できると考えられるが，第153次調査を除く第205・212・219次調査では，①面を調査の対象としておらず，調査成果としては不均衡が生じている。周辺における遺構の所属時期，つまり中世後半か近世かは，息浜における町割の変遷を考える上でも，重要な意味を持つだろうし，時期認定にはより慎重さが求められる。

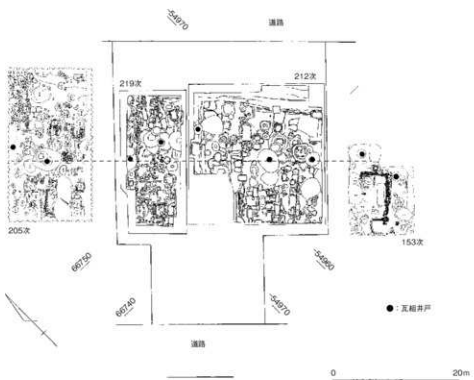


図32　第153・205・212・219次調査（1/600）

図版 1

①第212次調査区
東側全景（北東から）

②第212次調査区
東側全景南半（北東から）

③第212次調査区
東側全景北半（北東から）

①第212次調査区
東側全景（南西から）

②第212次調査区
北西側全景（南西から）

③第212次調査区
南西側全景（南東から）

図版３

①第219次調査区
北東側全景（南西から）

②第219次調査区
南西側全景（南西から）

③第219次調査区
南西側全景（北西から）

①柱穴・長方形土坑〔212〕（南東から）

②調査区北東側溝・石積土坑・土坑〔219〕（北西から）

③柱穴列〔219〕（南西から）

図版５

①SD090〔212〕（南東から）

②SD090〔212〕土層（南東から）

③SD111〔212〕（南西から）

①SK001〔212〕（南西から）

②SK063〔212〕（南東から）

③SK087〔212〕（南西から）

④SK115〔212〕（南西から）

⑤SK122・145〔212〕（南から）

⑥SK125〔212〕（南西から）

①SK004〔219〕（南東から）

②SK005〔212〕（南西から）

③SK005・017〔219〕（南東から）

④SK083〔219〕（北東から）

⑤SK084〔219〕（西から）

⑥SK085〔219〕（北西から）

①SK060〔212〕（北西から）

②SK080〔212〕（南東から）

③SK065〔219〕（南から）

④井戸群〔219〕（南東から）

⑤SK041〔212〕（西から）

⑥SK013〔219〕（北から）

①SK102・103・106〔212〕（東から）

②SK106・107・108〔219〕（北から）

③SK005・006・007〔219〕（南東から）

④SK065・066〔219〕（北西から）

⑤SK081〔212〕（南から）

⑥SK120〔212〕（北東から）

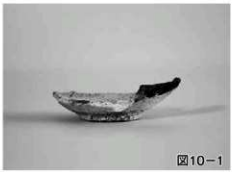


図10−1

図10−13

図12−6

図12−9

図16−2

図18−8

図18−12

図19−2

図19−9

図19−14

図19−16

図19−7

図19−13

図19−12

図22−3

出土遺物

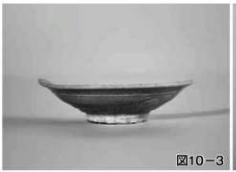


図10－3

図23－5

図24－7

図29－2

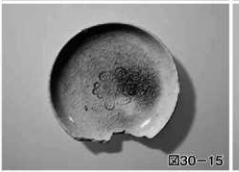


図30－15

図30－1

図30－12

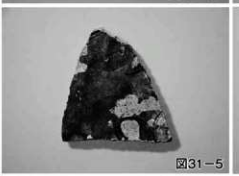
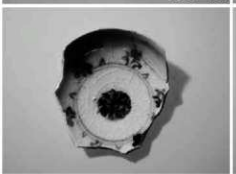


図31－5

図31－2



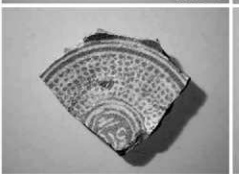


図29－4

図31－11

図31－1

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はかた168
書名	博多168
副書名	博多遺跡群　第212・219次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1397集
編著者名	藏冨士　寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神一丁目８番１号
発行年月日	2020（令和２年）３月25日

	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
博多遺跡群第212次調査	福岡県福岡市博多区下呉服町406-1他	40130	0121	33° 36′ 1″	130° 24′ 28″	2017年６月14日 ～ 2017年９月15日	450㎡	共同住宅建設
博多遺跡群第219次	福岡県福岡市博多区下呉服町422・423			33° 36′ 2″	130° 24′ 27″	2018年４月２日 ～ 2018年５月25日	250㎡	

所収遺跡名	種別	時代	遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群第212次調査	集落	中世後半（15・16世紀）～近世	井戸、溝 土坑、柱穴	中国・朝鮮・国産陶磁器 土師質・瓦質土器 土師器　鍋製品 土製品	
博多遺跡群第219次			井戸、溝 土坑、柱穴列	中国・朝鮮・国産陶磁器 土師質・瓦質土器 土師器　鍋製品 土製品	

要約

調査地点は、博多遺跡群の北東側、「息浜」の北東端部近くに位置する。検出した遺構は、石積土坑、土坑、柱穴列、柱穴、井戸があり、いずれも中世後半から近世までのものである。「大博通り」等、周辺における現在の町割は「太閤町割」の行なわれた中世末以降のものであるが、多くの遺構がこの町割線に沿っている。調査区北東側で検出した大溝（第212次調査：SD090、第219次調査：SD010）は16世紀半ばには埋没した中世後半段階の溝であるが、この溝は中世後半段階の町を区画する機能を果たしていたものと推察され、この段階における町割の基準となったものだろう。この両者にはズレがあり、周辺地域における各遺構の時期比定とそのあり方は、息浜地域における町割の変遷を考える上でも重要なものであるといえる。

博多168
－博多遺跡群　第212・219次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1397集

2020（令和2年）3月25日発行
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷　㈱大里印刷センター
福岡市東区二又瀬新町12－29